

大逆事件とお伽芝居

—— 沖野岩三郎 『宿命』 にみる高尾楓蔭の活動

堀 田 穰

はじめに

一、高尾楓蔭と沖野岩三郎

二、『宿命』の位置

三、単行本『宿命』におけるお伽芝居の記述

四、歴史的イベントとしてのお伽芝居弾圧事件

五、『宿命』における沖野岩三郎の受け止め方

六、何故「エルナニ」だったか？

おわりに

はじめに

明治の初期社会主義運動が、大逆事件という未曾有のフレイム・アップによる大弾圧で打撃を受け、離反者を多く出し、そうした人びとによって子どもについての文化運動が担われていったことを、これまで高尾楓蔭の業績を見ることで辿って来た。

高尾楓蔭や大道雷淵なども、死神の鎌が首筋をかすめていった思いだったろうが、沖野岩三郎ほどではなかった。新宮キリスト教会の牧師沖野こそ、大石誠之助らとともに大逆事件に連座させられなかったのが、奇跡としか言いようなない立場にあった人物であった。しかも、それで「転向」せず、逮捕者たちへの救援活動を起こし、さらに表現者として、大逆事件を材にとった「宿命」という小説を書き、大阪朝日新聞懸賞小説の二等に当選する。だが、当局の圧力により、内容は歪められたまま、未だ投稿時の内容は伝えられていない。

本稿は、初期社会主義運動の中で知り合った高尾楓蔭のお伽芝居活動が、沖野岩三郎の『宿命』に残した知られざる足跡を取り上げ、歴史の証言として確認することを試みたい。

一、高尾楓蔭と沖野岩三郎

高尾と沖野は和歌山市内の三木町にあるキリスト教会(現日本基督教団和歌山教会)の青年会活動で出会ったよ

うだ。それは明治三十六（一九〇三）年頃、高尾が二十四歳、和歌山実業新聞の記者、沖野が二十七歳、和歌山第二男子高等学校教員という青年期のことであつた。

「青年会は遅くとも八月から公的な活動を始めた。即ち、同月の毎日曜に三木町教会で午後七時半から大演説会を開くことにし（『青年大演説会』、『紀伊毎日新聞』、明治三十六年八月八日、二頁）、実際にそうした模様で、第三日曜の一六日には午後七時半から第三回大演説会を開いている。当夜、沖野の司会で演説会は始まった。沖野は『マタイ伝』第七章を朗読した後、『不老不死』と題する感話を行い、それから演説に移った。第一席は成瀬紀州で、成瀬は『先づ肉体を研究せよ』と題して、要領を得ない露払演説を行った。

第二席は山野死骨で、山野は『死』と題して、世人が死を恐れるのは無意味であることを論じ、死は生命の終局でなく、実に永久不滅の生命に入るための門であると喝破した。第三席は高尾楓蔭で、高尾は『社会主義と平和的実行』と題して、先ず社会主義に対する世人の誤解を弁じ、次に社会主義の四大綱領を述べ、この主義の実行は人類社会に自由・博愛・平和・幸福の美しい花と実とを与えるものであると結論し、拍手・声援を受けながら降壇した。第四席は児玉怪骨で、児玉は『大悟徹底』と題して、世人が人爵を渴望・盲拝し、数倍高尚・尊貴な大悟徹底の人、即ち天爵を有する人を軽視することを憐み、その間に種々の活きた台詞を引用して、聴衆に大きな感動を与え、拍手・喝采に送られて降壇し、これを以て演説会は閉会した。なお、当夜は聴衆が教会堂に充ち、非常な盛会となつた（『第三回青年大演説会』、『紀伊毎日新聞』、明治三十六年八月一日、二頁）。

八月第四日曜の二三日にも大演説会は開かれたらしく、沖野が『滅亡近きにあり』を演説した他、児玉

は『現代の思潮』、鈴木は『催眠術と宗教』、山野は『救済とは何ぞ』、高尾は『社会主義の立場より現時の道德問題を論ず』を演説したらしい（『青年演説会』『紀伊毎日新聞』、明治三十六年八月二三日、二頁）。¹

（岡崎一、一九八四（七）、七頁）

この明治三十六（一九〇三）年、四月には高尾は奥村梅皋^{ばいこう}、児玉花外らと社会主義研究会を大阪で開いたり、発禁になった児玉化外の『社会主義詩集』への同情録を書いたり、社会主義の啓蒙活動に関わりはじめた頃であった。

二、『宿命』の位置

福森裕一の先行研究をまとめるだけだが、明治四十三（一九一〇）年大逆事件の逮捕を免れた沖野岩三郎は、大正五（一九一〇）年十一月、大阪朝日新聞社が本社新築落成を記念して募集した「懸賞文芸小説」に応募作品『宿命』を出し、二等当選を果たした。これは沖野の文壇デビュー作ともなった。

しかし、その内容は、内務省警保局の干渉により

「『政治史又は思想史の貴重なる資料』としての文献的価値のある社会的作品から、三人の女性を中心とした作品へと大きく変更された」
（福森裕一、二〇〇九A、二三頁）

ものとなってしまった。

この改作後の『宿命』は大正七（一九一八）年九月六日から新聞連載されることになる。これは十一月二十日



写真1 『宿命』改訂版(1926)
福永書店

にまで続けられた。そして、翌大正八(一九一九)年十二月福永書店から、連載原稿に大幅に加筆修正を加えた単行本『宿命』が出版された。しかし、

「結論から言うと、沖野は単行本『宿命』においても、大逆事件を克明に描くことは出来なかったのである。単行本『宿命』で描かれているのは、大逆事件をモチーフとした大きな社会的視点からの『宿命』ではない。それは、主に遺伝の問題や大地家の滅亡といった非常に規模の小さな個人的な『宿命』に終始したと言わざるを得ない。」

(福森裕一、二〇〇九A、二七頁)

という矮小化されたものとなってしまったようだ。

ただ、以下に明らかにするように、単行本『宿命』には、高尾楓蔭が社会主義運動から転じた、お伽芝居の活動が記述されていたのだ。これもまた文化史または思想史上の貴重な文献的価値ある社会的作品を示すものではあるまいか、と思うのだ。

もちろん、福森が、

「投稿原稿『宿命』は大逆事件を克明に描いた近代文学史上比類のない作品であったことは間違いない。だからこそ、資料的価値を含んだ沖野の小説『宿命』を研究する上においては、一刻も早いオリジナル原稿の発見が望まれる」

(福森裕一、二〇〇九B、三六五頁)

と述べているように、当然ながら歴史上の「秘密」が明かさ

れるべきであるのは、もっともなことである。

以下、実際に引用するテキストは単行本『宿命』の大正十五（一九二六）年改訂版からで、福森によると大正八年初版にさらに加筆訂正が行われているようだ（福森裕一、二〇二二）。厳密には新聞連載版や初版も参照すべきだろうが、今回その余裕はなく、改訂版のみを使っている。

二、単行本『宿命』におけるお伽芝居の記述

対象となるのは『宿命』大正十五年改訂版の一三九頁から一七八頁に至る三十九頁の部分である。まず、沖野岩三郎自身をモデルとした音無牧師と、高尾楓蔭亮雄をモデルにした高木助雄が大阪で出会う場面から始まる。引用は現代表記法により、新字体に改め、一部の漢字をかなに書き換えている。冒頭の丸括弧内にはその引用の要約を記す。引用の最後には単行本『宿命』大正十五年改訂版の頁数を付す。

（道頓堀での高木の講演）

「神戸で開かれた牧師会に出席しての帰るさ、音無は大阪へ一晩泊って噂に聞いていた千日前と道頓堀の夜景を見に行った。雑踏中を揉まれながら門並の絵看板を見るとはなしに見つつ中座の前まで来ると、大きな立て看板に墨黒々と『文芸活動写真、講師高木助雄』とあるのが眼に留った。

『高木助雄？学院にいたあの高木じゃないかしら？』と呟きつつ講師の名前に牽かれてツイ入って見ると、表の景気とは打って変わった不入で、場内はガランとしている。

一二分経つと電気が暗くなって、映し出されたのはミルトンの失樂園悪魔の評定の間であつた。弁士は普通の活弁であつたが、写真が面白いので夢中になってフィルム跡を追っていると、やがて一時間ばかりして、幕間のバイオリンの独奏が終つて、次のフィルムに移る前、小柄で色の白い長髪の男がフロック姿で舞台に現れた。

『高木君だ、高木君だ。』と音無は一目見て我知らず下足札で膝をたたいた。

高木は物柔らかな沈着な口調で、まずミルトンの生い立ちから二十七年間の失樂園の苦心、しかもその辛苦に対する報酬がわずかに十パウンドであつたことを述べ、さらに英国魂の説明から転じて我が日本魂の英国魂に劣らぬゆえん、この清い日本魂がマンモンや、モーロックのような悪魔に汚されざらんことを欲する希望をまで陳べ終つた時、喝采はまず二階の正面から起こつた。やがてフィルムは一時間ほどかかつて人間の最初の悲壮なる歴史を段々と展開して会を終わつた時、音無は夢幻の世界から初めて現実世界へ帰つたような気がした。」

(二三九―一四〇頁)

この後木戸口で、松本時子と音無が出会い、その後二人は高木に会う。

(高木との会見)

「『』とにかく外へ出ましよう。』音無は靴を下足番から受取つて外で待っていると、左手の木戸口から高木が出て来た。

『高木君!』音無はその側へ駆けよつた。

『やア、音無君じゃないか。僕もとうとう活弁じゃアなくて「活講」になつたよ。』

『面白かった、なかなか面白かった。』

『時に音無君、君は今どこにいるのだい。』

『僕は紀州の熊野にいる。』

『そうか、えらい所にいるんだネ。』

(一四一頁)

三人はカフェーに入つて話をする。そこで高木は活動写真と新劇協会の一座を加えて熊野へ乗り込むことを提案する。松本時子がお金を引き受けるという。音無は大石誠之助がモデルの田原清一が資本を出している「サンセット」という新聞に、石塚覚也という高木も知っている男が新聞記者をしているので、そこに主催してもらおうということになる。

新宮に帰った音無が田原に相談すると、興業人湯桁牧太郎に万事を頼むがよいというので、音無は湯桁を訪ねる。湯桁の協力を取り付けて、いよいよ高木の劇団がやって来る。

(新宮での公演)

「わが社いささか考うる所あり、社会改良策の一助として来る十五日より三日間宮町旭座に於て、少壮文芸家として聞こゆる高木助雄氏の組織せる日本新劇協会一座を招聘し、仏国文豪、ビクトル・ユゴーの傑作「エルナニ」を公演いたし候。同座には特に哲学博士、荒川重人氏舞台監督兼技芸員として加入いたし候。

かつ右新劇の外、英国詩聖ミルトンが三十年間の苦心に成る大傑作失楽園の大活動写真をご覧に入れ候。右は一般観覧者を謝絶し、本紙刷込の入場券(一日分九百枚)ご持参の方に限り入場料金四十銭にて、布

団、火鉢、茶、一切無料にて差し上げ、かつ粗菓進呈仕るべく候。

この広告が新聞サンセットの第一面に二号活字で掲載された時は、小さい町はにわかに動揺して町中どこへ行っても芝居の話で持ち切ったのであった。

九月十三日の朝。高木助雄の一座二十四人は新宮の町に乗り込んで来た。荒川博士は出発間際ににわかに発熱して一座に加わることが出来なかった。

高木は宿へ着くとすぐ音無を招いた。田原も覚也も来た。四人が相談の結果まず旭座で文芸講演会を開くことにした。入場無料が人気を呼んで場内は破るるばかりの大入りで、失樂園とユーゴーに関する四人の講話がいずれも聴衆を感動せしめた。

講演会の成功はいやが上にも人気を煽って、翌日のサンセット社は新聞購読者で上を下へと混雑した。

いよいよその日となった。開幕前から満場爪も立たぬ程の大入りであった。六時半に『エルナニ』の幕が開いた。高木のソル姫を始め、三浦の山賊エルナニ、水谷のカルロス王、素人ではあるが、みんな相応に舞台慣れていて、一同車輪にやつてのけたから見物はいずれも片唾を飲んで大喝采をした。とくに松本のシルバ城内の老候は非常によく出来た。いよいよ三幕目のエルナニが恋の仇カルロス王を殺しに行こうと決心する所でひとまず演劇を終わって活動写真に移った。

幕の閉じた時、見物席から『芝居をやれ、活動写真は明晩にせエ。』などと叫ぶものもあったが、いよいよ楽園歓楽の美観や天魔波旬の壮観が映し出された時は、見物は静まり返って観た。その晩はアダムと

イブが知恵の樹の実を食う夢を見る五巻目の初めまで映して閉会した。

雪崩を打って出る見物の誰も彼もが、みんな芝居も活動も面白かったと取々に評判していた。音無は群衆に紛れて評判を嬉しく聞きながら帰ったが、何だか頻りに興奮して眠れなかった。

三年前に高木が牧師をやめて劇壇の人となると云った時、牧師間で一寸問題にしそうであったが、極力高木の弁護をしたのは音無であった。その高木が舞台の上から数百数千人の人々を自由自在に泣かせたり怒らせたりして居るのを観た時、声をからして説教しても五人十人しか集まって来ない自分の境遇に引き較べていささか高木を羨ましくも思った。

翌日は観客が開場を待ち兼ねて一時にドツとなだれるように入場し、即時に満員となって、リカルド王が長々しい独白をやっている時、大木戸で『入れろ、入れろ！』とひしめく声が聞こえた。

四幕目の末にリカルドが神聖帝国の帝座にのぼって、山賊エルナニにソル姫をあたえ、『しあわせになドン・ファン。姫は御身の妻にしる、御身は愛する姫を手に入れた。朕は神聖帝国の帝位を得た。エルナニ！今までのことは一切忘れたぞ！』の台詞で幕切れになると満場は破るばかりに喝采した。再び幕が開いて第五幕目の幕切れのエルナニとソル姫とが毒を仰いで天を指しつつ『美しい国へ！』と抱き合った時、臨監の巡査は突如として『中止！中止！』と叫んだ。しかし実はこれが終わりであったので警吏の中止は無意味であった。

続いて活動写真となって、昨夜の残巻の第五巻の後半から映しはじめたが、九巻のはじめの悪魔が毒蛇を尋ねる所まで来るともう十二時近くなったので、高木は舞台に現れて、明晩は写真の残巻を最初に映し、

エルナニを序幕から大切まで演じ、最後にチェホフの傑作『犬』を一幕演ずる旨を広告して打ち出しとなつた。

音無と覚也とは化粧部屋に入つて行つて、高木と握手しながら成功を祝した。

『中止とはひどいネ、あんな所で。』と覚也は憤慨した口調で言つた。

『日本の旧劇にはもっとひどいのあるんだけど、』と音無は笑いながら、『新の字が付くと何でもいけないのだ。』

『そうだ、新宮なんていう地名もあらためなきゃいけないよ。』と高木も笑つた。

『そうさ、この節は新という字と社会という字が大禁物だからナ。会社の看板を倒に置いても首が飛ぶかも知れんぜ。』音無は喉をかするようにながら言つた。

『実際、敏感だからナア。』と覚也は真面目に言つた。

(一五五―一五九頁)

翌朝になると熊野警察署から召喚状が届き、音無が警察署に行くと、弾圧とも取り調べともつかぬことが始まつていた。

(警察署)

『封筒に『熊野警察署』と書いてあるので不思議に思いながらひらいて見ると、相尋ね度儀有之候條此通知書受領次第実印携帯の上即刻当署まで出頭すべし

もし事由なくして出頭せざる時は相当の処分する事あるべし。

という蒟蒻版摺の召喚状であつた。音無はあるいはエルナニ劇の事に関しての質問ではないか知ら……

と思いながら警察へ行つて見ると、警察署には召喚状を持参した男女が四五十人も詰めかけていて、署長、警部補、部長等七人がかりで必死に聴取書を作っている。音無は柱の傍らに立って四十二歳の女が八字髭の巡査に取り調べられているのを聞くと、果たしてこの多数の召喚がエル十二劇に関係した事であると知った。

巡査は女の生命年齢を一通り聞きただしてから、

『朝日座の芝居へ行つたか。』

『へえ参りました。』

『お前さんの家にはサンセットちう新聞を取っているんだネ。』

『へえ、読んでいます。』

『あの新聞は何主義だという事を知っているのか。』

『主義？そんなものは知りません。』

『社会主義の新聞だという事を知っているのかと云うのサ。』

『知りません。そんな事は……。』

『芝居は面白くなかつたらう？』

『私らにはむずかしいうて。異人さんの芝居ですさかい。』

『四十銭出したのか。』

『へえ払いました。』

『四十銭が惜しくなりはしないか。あんな芝居を見て。』

『私たちのいつも行く芝居の木戸銭は二銭三銭ですさかい。』

『その金を返してやろうと云ったらどうする?』

『そりやア返していただきます。』

『では切符を買わなければよかつたと思うんだナ?』

『まア、そう言えばそうです。』

『サンセット社にだまされたと思わないか。』

『そうです。評判程でなかつたさかい、まアだまされたも同じことです。』

『よろしい、これへ印を捺しなさい。』

音無は初めて聴取書というものを知った。女の向こうには五十ばかりの小柄な男が部長に調べられている。

『えエ、欺されましたも、エライ目にあいました。まるで役者は素人ばかりですもの。あれで三等鑑札を持つて居るものが、たった八人しかないので。活動の機械は杉本商会からだ、だで借りて来たのじゃと云う話じゃし、役者には全体で一日二十円もやれば十分じゃろうし、どうしても一日に三百円は儲かりましたナ。田原さんもなかなか食えん人ですよ。』と声高に言っていた。音無は憤然として一二歩部長の方へ近寄ったが、部長はおとなしそうな顔をして、せつせと聴取書を書いていた。音無は頭の中で『罪と罰』の小説にあるラスコーリニコフが警察で召喚された時の記事を想い出して、あの二等警部のような横

柄な警部が自分を取り調べたなら、そして二等警部が、あの Ich danke と独逸語で答えた白い着物をきたりっぱな婦人を罵ったように（うぬ、貴様、たわけめ！）などという乱暴な言葉でくっつかかって来たならどうしよう？ などと考えていると部長は頭を上げて、

『何か御用で？』と問うた。音無は召喚状を出して見せると、部長はそれを持って別室に行ったが、やがて再び現れて、ていねいな言葉づかいで、

『どうぞ二階へお上がり下さい。』と階段の所を教えてくれた。音無は下駄ばきのまま二階へ上がって見ると、ガラシとした広い正面に一間幅の黒板を背にして、色の浅黒い髭のない警部が机を控えて頻りに書きものをしていたが音無の来たのを見て、『どうぞお掛け下さい。』と言って机の呼び鈴を二つ鳴らした。

十五六の小使いが上って来たので警部は巻煙草をひねくりながら、『加納巡査に来て下さいって、すぐだよ。』と言って煙草に火を吸いつけたが、巡査の来たのを見て、

『君、ちよっと聴取書を書いてくれたまえ。』

『ハッ承知しました。』と巡査は警部の傍らの椅子に腰をかけた。

例の如く族籍調べをすましてから、警部はしずかに尋問を始めた。

『新劇協会の高木君とはどういうご関係ですか。』

『白金学院の同窓です。』

『あなたはエルナ二劇を、日本の国情に適した劇だと思いませんか。』

『必ずしも日本の風俗に一致するとは言えませんが、別段風教に害があるとは思いません。』

『帝王と泥棒とが女を争うというような事は不穩当じゃないでしょうか。』

音無は黙っていた。

『それから何とかいう女が短剣を抜いて『一足近寄れば王のいのちはない。』と言う所があつたようですが、あれはどうお思いです?』

『そういう部分部分のご質問では。』と音無は頭を掻きながら、『エルナ二劇そのものについてはずいぶん議論の余地もあります。』と、そう抽象的にお尋ねになられると、ちよつと困ります。』

『中傷的? 僕は決して中傷なんかしないです。』

警部は真面目であつた。そして姿勢を正した。音無は今少しで失笑する所であつたが、急に他人の無学を笑おうとした小さい自尊心を愧かしく思った。

『あの興行について金銭上のご関係はありませんですか。』

『少しもありません。』と音無はキツパリ答えた。』

(田原邸)

(一六〇—一六五頁)

「音無は警察からすぐその足で田原を訪問した。すると、『やア、やられたナ、君も。』と田原は笑いながら玄關へ出て来た。

『今調べられて来た所で……』

『そうか、まア入りましたまゑ、高木君も来ているよ。』

音無が奥へ通ると、高木はクシヤクシヤした様子で、

『朝ッばらから警察へ呼ばれて、ウンと油を取られて閉口したよ。』

『露西亞の警察だったら、ラスコーリニコフのように洒落の一つでも言われっるんだが、どうも日本の警察は威風堂々としているからね。』

『ところが僕を調べた加藤何とかいう警部は、イリヤ・ペトロビッチだからな。』

『どんなことを聞かれたかい？』

『どんなもこんなもない。エルナニは秩序紊乱の恐れがあるんだとサ。』

『じゃア興行停止かネ。』

『マダ今夜の興行届はしてないんだが、どうせ芸題変更を迫られるだろうよ。』

『芸題を変更しちゃうア、入場券を買った連中がそのままですまないだろう。』

『だからやるさ。うんと思うさまやってやるよ。』

『それはいけない。喧嘩腰になる必要はないよ。王と言って悪い所は大将と言ってもよいじゃないか、淨瑠璃の文句でも、太閤記十段目で(天子將軍になったとて……)と云う所の天子と云う二字を抜いてしまったり、一ノ谷嫩軍記では(敵と目ざすは安徳將軍)などという時代だもの、讓歩したまえ、警察へ楯を突くのはいけないよ。』

『じゃア君はユーゴーの大作を勝手に改作しろち言うのだナ。』

『そうじゃアないが……』

『じゃア堂々とやるより外はない。七十八年前から全世界の何千万人に読まれた大作が新宮の町の人にだ

け不穩だという理由があるか。大いに争うネ。』

『大変なけんまくだな。マグダでもノラでも、日本の舞台ではみんな肝心の文句を引き抜かれてるじゃないか。展覧会の裸体の彫刻へは赤い腰巻をまかせる時代だもの。』

『じゃア音無君、君は新約聖書のキリストという文字を弘法大師、パウロを行基菩薩と改名して読めと言われた時どうする?』

音無は黙ってうつむいてしまった。しばらくして高木は顔色を和らげながら、

『なアに、言わば今度のことも一種の喜劇サ。今朝僕は警察であんまりいろんな事を訊かれるから少々面倒くさくなって。西洋ものがおい、やなら高山彦九郎でもやりましようかって言ったら、警部はげんな顔をして、(高山彦九郎って俳優が居るのか)ってご質問じゃないか。』

田原も音無も思わずふきだした。最前から始終沈黙して二人の問答を聞いていた田原は微笑を含みながら、

『何でも警察へひどい投書をした者があつたらしい。今度の興行は第一思想がいけないのと、一つは誇大の広告をして不当の暴利を食らうとするため、俳優の球団は一座二十四人に対して一日二十五円、活動写真のフィルムは無料だから一晩で二百円以上は儲かるなどと密告したものがあるのらしい。劇場料も電気料も税金も船賃も一切無料にしてくれば、それくらいは残るかも知れないが、税金だって三日で百二十円もいるんだがネ。』

『そんな投書を警察署は信じたのでしょうか。』

音無は腹立たしそうに言った。

『なアに敵は本能寺にありさ。第一広告に社会改良策の一助としてという文字のあったのが、悪かったんだよ。義主会社が崇ったのだよ。』

田原はそう云って、はッは、はッは、と笑った。

『義主会社？義主会社？』と高木は首をひねっていた。

『会社の看板を倒にして置けない土地だもの。』

『なるほど！』と高木もこぶしで膝がしらをたたきながら笑った。」

(二六五―二六八頁)

最後に高木と松本時子の対話で、時子は伊勢へ立つという。「座員の方は四日市の方で興行してらっしゃるんでしょう。」という時子の問いかけがある。事件の顛末が興業人湯桁と、サンセット新聞の署名人清水が二十日間の拘留で済んだことを高木が語る。宗教ではだめだと芸術に携わったのだが、それもだめだと言い、

『落伍者ですから女を論ずる資格はありません。イヤ女ばかりではない。一切が幻滅です。もう僕も芸術を断念して、トラピストへでも入って一生を無言で暮らそうか知ら？』

(二七八頁)

という傍白で高木の登場は終わる。

四、歴史的事件としてのお伽芝居弾圧事件

さて、長い引用になった『宿命』の一部だが、高木助雄が^{たかおあきお}高尾亮雄をモデルにしていることは間違いない。

亮はすけ、とも読めるし、「小柄で色の白い長髪的男」（二三九頁）という容貌も楓蔭高尾亮雄その人のものだ。ただし小説の設定のように、大石誠之助の援助によって、新宮で高尾の芝居が行われたわけではない。実際には明治四十一年（一九〇八）年十月一日の、三重県津市の観音寺境内の曙座あけぼのでのことであつた。

「お伽芝居中止騒ぎ」

一昨日午後六時半より当曙座に開会せるお伽芝居は満場立錫の余地なき大入りにて観客は大人二分小人八分の割合にて当日は育兒院の子どもも招待したり定刻に至るや若山主幹の開会の辞君が代の唱歌ありて序幕鬼だまし、齒ぬけ狼、牛若弁慶を演じ此の間に高尾主事はお伽芝居の事に付き演説を為し次に浮かれ胡弓に移りしが第四場目に至り巡査が胡弓を聞きて浮かれ出し踊る様は滑稽にて喝采を博し幕を閉づるや臨監の某巡査は忽ち楽屋に入り該劇は公安を害するものと認むべきを以て中止せよと迫り若山主幹は中止せずと述べ益々議論に花が咲き何時果つべしとも見えず此の時高尾主事は舞台に現れ中止を命ぜられたる次第を述べて観客に詫びたるも観客は容易に聞き入れず演者に同情を表してヤレヤレと絶叫し喧噪云わん方なく一時は非常の騒擾を極めたるが結局中止することとなり其代りとして猿蟹合戦後日物語を演じて十時過ぎ無事散会したり」

（『伊勢新聞』一九〇八年十月三日五頁）

この事件については、高尾本人も回想がある。

「わたしたちのお伽芝居は名古屋で可なりの好い宣伝をされていた事だから、中京の各新聞の勢力範囲である三重県にも噂はそれからそれと流布されて、学校方面にも大に期待をもたれていたところへ、乗り込んで行ったから、素晴らしい人気を博した。芸題はヴェニスヴェニスの法廷をお伽式にやり直した『動物裁判』」

に『歯ぬけ狼』と、この『うかれ胡弓』だったのです。三重県は当時、脚本の検閲が保安課で取扱わないで、劇場へ臨検しにくる興行係りの一巡査にまかしてあった。『うかれ胡弓』の上演は第一、二、三場とまでは無事、第四場に至って、上官・下官の警察官が魔法の胡弓で浮かれ出すくだりになると、劇そのまの虎髭さんが、ツカツカとわが舞台上に上って来て『この劇はこれからどうなる、警官を侮辱するような仕草があるから差止める』ときた。『ハイ、これは空想のお伽芝居で、しかも外国の世界でござりまするし、第五場では裁判官も踊りますヨ』と皮肉をいうと、件の御役人ますます怒って興行の全部中止を命じた。

わたしはわざと恭しく『御命令なら致方ありませんが、一応見物の方々にお断りをいたしますから』と、フレットの舞台衣装のまま、大演説を始めた。見物は無論こちらに同情して『やれやれ、大いにやるべし、警官横暴横暴』の声が大向からかかってくる、さながら今日の労働演説会そっくりの光景、こちらも調子にのって、しゃべり出す。お巡りさんは何でもない旅役者位に思っていたところが、存外口達者な弁論家がそろっているのです、テレくさく、満場の聴衆から慢罵を浴びせかけられていよいよ真赤になる、このところ劇以上のおもしろい場面を現出したのでした。

翌日、わたしは県庁の保安課に出頭していろいろ陳弁に及び、陳謝してみたが、綸言汗の如く一度中止を命じたものは三重県内では一切興行まかりならぬとの官僚一流の威儀を示されて、ここに万事休す。そこでその足で土地の新聞社に飛び込んで、事情を訴えたと、こんな土地としては大にニュースバリューがあるところから可なりな紙面を割愛してくれて、わたしたちに勝手に書けという。筆執ることは元から本

職、田舎新聞記者以上だから警察攻撃の鋭い筆鋒を揮った。」

(高尾亮雄、一九二九、三四―三五頁)

この事件を歴史的イベントとして初めて研究して、論文にとりあげた武内善信は、新宮にいち早く伝わったことを述べていた。

「お伽芝居中止事件が全国にどの程度広まったか分らないが、隣の和歌山県新宮の『熊野新報』には一週間ほどで伝わっている。ただし、ここは大石誠之助のおひざ元で、和歌山時代の友人の沖野岩三郎が牧師として赴任しており、特殊な例かもしれない。」

(武内善信、一九九六、一七七頁)

としている。その『熊野新報』の記事を全文収めておく。

「伊勢国津市に於て興行せしお伽俱樂部演劇中に社会主義の意味ありとて其筋より中止され役者一名は警察署に拘引されたそうなる。ソコで小兒相手の芝居も中々油断はならずと咄く者がある。蓋し在世歴史家の笑い草だろう。」

(『熊野新報』一九〇八年十月十二日)

五、『宿命』における沖野岩三郎の受け止め方

『熊野新報』の記事を沖野は間違いないと読んだに違いない。そこから嵐のように明治四十三(一九一〇)年の大逆事件に巻き込まれ、大正五(一九一六)年に大阪朝日新聞に『宿命』を投稿し、大正八(一九一九)年、単行本『宿命』を発行、大正十五(一九二六)年改訂版を出したわけだが、その中で、四十頁に近い部分として、高尾のお伽芝居弾圧事件を小説に取入れたのはどのような意図だったのだろうか？

『宿命』において、高木の新劇協会を受け入れる先となったのは「サンセット」という新聞社であった。実はこれは虚構ではなく、編集人沖野岩三郎、発行兼印刷人沖野ハル、発行所は和歌山県新宮町百五十八番地落陽社から「サンセット」が出されたのは明治四十三（一九一〇）年二月十五日のことであった。大石誠之助と沖野の共同編集と言っているようにうだ。

「一九〇一（明治四十二年七月）和歌山県知事の交代があった。これまでの伊沢多喜男から、富山県から赴任した川上親晴への交代である。ちなみに、伊沢の子息が、後の劇作家飯沢匡（本名伊沢紀）である。」

新任の川上は、警視庁で社会主義鎮圧係りを専門にやった経歴があった。川上知事は新宮中学のストライキに関する談話のなかで、『同町には社会主義を抱いているものがある、是等が学生に感化を与えるといふ事は頗る危険な事である。大石某はこの社会主義を抱いているもので』と、直接誠之助の名を挙げて指弾し、『我が建国の基』に離反している社会主義を、『容るる事は断じて出来ないのである』と、強い決意を語っている（『牟婁新報』明治四十三年一月六日付）。「サンセット」が発刊されるのは、ちょうどそういう時期であった。」

（辻本雄一、熊野新聞社編、二〇一一、六九頁）

「サンセット」の第五号は明治四十三（一九一〇）年六月十五日だが、すでに大逆事件の検挙が始まっており、大石宅の搜索、五日深夜には大石誠之助は拘引されているという、緊迫の中にあつた。

つまり、高木助雄の新劇協会公演が中止され、それを受け入れていた「サンセット」新聞も処分を受けるといふ小説の中の進行は、まさに大逆事件の激しい緊迫した事態を、沖野岩三郎にとって想い起させる設定だったと言える。事件そのものをあからさまに取り上げて書くことが出来ない状況は続いていたわけだが、「熊野



写真2 「サンセット」第1号第1面



写真3 新宮市立図書館 (撮影筆者)

新報」が報じた津市でのお伽芝居中止事件に、沖野が予感した事態がそのまま大逆事件につながっていったのである。

そのために高尾楓蔭が子どもに感じたような未来性を、お伽芝居に感じていたわけではない沖野岩三郎は、西洋演劇を登場させるが、子ども向けのものとはしなかったのかも知れない。ただ、小説中に活動写真での講演なども含めて、いかにも高尾がやりそうなことというリアリティは感じられる。伊勢での事件の報道を読んでも、もし「サンセット」が彼らを呼んだなら、というシュミレーションをして見たとも言える。実際の「サン

セット」はコピーが新宮市立図書館にもあり読むことができるが、同人紙的なものでいわゆる商業紙のように興行を企画したり、主催したりというようなことは、およそできそうにはなかったのだが。

六、何故「エルナニ」だったか？

管見からすると、『宿命』についての先行研究で、何故ユーゴーの「エルナニ」をここで採用したのかの分析をしたものを見つけることができなかったもので、さらに私見を連ねることにしよう。

歴史的事実として、高尾楓蔭達のお伽芝居では「うかれ胡弓」や「動物裁判」など、巖谷小波の「世界お伽噺」を西洋もののレパートリーの源泉としていたが、『宿命』内での「サンセット」紙の広告では、

「仏国文豪ビクトル・ユーゴーの傑作『エルナニ』を公演いたし候。同座には特に哲学博士、荒川重人氏
舞台監督兼技芸員として加入いたし候。かつ右新劇の外、英国詩聖ミルトンが三十年間の苦心に成る大傑
作失楽園の大活動写真をご覧に入れ候。」
(一五五―一五六頁)

と、あった中の荒川重人博士という名前に注目したい。これは荒川重秀博士が実際の名前で、高尾楓蔭とともに、お伽芝居の発展形として、家庭劇を提唱したことで知られている。家庭劇協会設立趣旨が発表されたのは、明治四十五(一九一二年)一月の『文藝画報』誌であった。

「雑報

家庭劇の成立 荒川博士とお伽芝居の高尾楓蔭氏との発企にして第一回には菊池幽芳氏の『家なき児』を

演ずべしと

家庭劇協会設立趣旨

小説に家庭小説ある如く劇にも又た家庭劇なからざるべからず

現在に深刻なる社会劇の存立せらるべき一面に於て清新なる家庭の趣味に適する演劇の要求せらるる又た必然の事なりとす

家庭劇は現代の趣味に遠ざかりつつある時代劇の他に無味沈滞にして時代の風潮に伴わざる所謂新派劇の他に一種清新なる藝風を興さんとするにあり

家庭劇には此の卑俗と惨忍の分子を含まず飽くまでも高雅にして平易しかも時代の進運に順い婦人と児童を中心としたる家庭団欒の健全なる娯楽に適せしめ以て聊か社会教育の一端に資せんとす

家庭劇の技藝員は品位高尚にして相当の学識を有し教育文藝に深き趣味を持し専心技藝の研鑽をなし技藝監督に於て適当と認めたる者を以て組織す

家庭劇協会規定

- 一 本会を家庭劇会と称す
- 一 本会の趣旨を賛成する者は内外人男女を問わず入会する事を得
- 一 会員は会費として毎月金一円を納付するものとす
- 一 会員は本会の公演及び講演会等に同伴者一人を共に出席する事を得

- 一 本会は京阪神各地に於て毎月四回以上の公演をなす
- 一 本会に別に講演部を設け時々内外知名の士を聘し教育文藝に関する講演会を開く
- 一 本会に技藝部員を置き技藝監督の許に研究練磨せしむ
- 一 本会に顧問評議員技藝監督及び理事を設け理事は会務を処理す
- 一 本会の事務所を大阪市北区堂島裏町三、九に設く

発企設立者 荒川重秀

同 高尾亮雄（『文藝画報』、一九二二年一月号）

同年三月には浜寺公会堂にて「家なき児」が演じられたようだが、沖野岩三郎はこの家庭劇協会での高尾楓蔭と荒川重秀の活動を知っていたのだろう。

荒川重秀については外山敏雄の論文「札幌農学校草創期の人々：W. I. Brooks 及び荒川重秀」に詳しい。それによると安政六（一八五九）年生れ、明治九（一八七六）年札幌農学校第一期生。明治四十四（一九一）年大阪で川上音二郎の大阪帝国座旗上げに参加、本職の俳優になった、となっている。高尾との接触はここであったに違いない。アメリカ留学の経験があり、シェイクスピア劇の翻案脚本を書いたそうだ。

それにしても、「家なき児」でなく、小説中でなぜビクトル・ユーゴーの「エルナニ」であったのか？まず、驚いたことに、板垣退助は明治十五（一八八二）年末から翌年四月下旬まで、後藤象二郎らとともにパリに滞在し、そこでユーゴーとの会見を行っていたのだ。そのころのユーゴーは十九年におよぶ亡命生活を終え、第三共和政下の民主主義のカリスマ的シンボルとしての国民的英雄だった。会見は実際にあったようだが、自由民

権運動はこの会見を存分に政治利用する。有名な「板垣死すとも自由は死せず」という板垣退助の台詞もこの文脈上にあったようなのだ（稲垣直樹「ユゴーと日本」。また明治二十年代になると、森田思軒は、ユーゴーの死刑廃止という社会的立場を明確にした作品を翻訳したという（川戸道昭・榊原貴教、二〇〇九、一二七頁）。

『宿命』が書かれた大正年間には、この政治的イメージはすいぶん弱まっていたが、自由民権運動は、社会主義とはおそろく区別されただろうから、社会主義演劇ではないということと、しかし、人道主義・自由を希求する、という二つのメッセージが込められたのかも知れない。さらに、ユーゴーについて細かく見ると、「エルナニ」という戯曲は、コメディ・フランセーズにいったん受理された「マリオン・ド・ロルム」（二八二九年）が稽古前に上演禁止になり、急きょ「エルナニ」に着手し一ヶ月足らずで完成、古典主義演劇対ロマン主義演劇の対立に決着をつけたというエピソードがある（佐藤実枝）。これも実際のお伽芝居上演禁止事件との絡みを微妙に刺激する話ではあるのだ。憶測はこのくらいにするが、沖野の脳裏に「自由は死せず」の言葉くらいは鳴り響いていたような気がする。

武内善信は、伊勢新聞や熊野新報の記事に触れて、警察の過剰反応をからかっていた新聞は極めて常識的だった。

『逆に、警察の異常さばかりが目につく。『其会の関係者が何々主義者』であるからと伝えられているように、高尾楓蔭や大亦墨水が初期社会主義者であったことが中止の大きな要因であろう。これは社会主義に対する当時の体制側の過剰反応ぶりを示す好例と言える。こうした権力の異端排除の過剰性が、『大逆事件』のフレイム・アップに至ったのである。』

（武内善信、一九九六、一七八頁）

おわりに

『宿命』を読もうと思ったのは何時の事だったろうか？ 沖野岩三郎の存在と役割を知って、やはり読んでおこうと思ったのにちがいない。一読して我が目を疑ったのは高尾楓蔭が明らかにモデルになっている高木助雄のエピソードが出て来たことだった。大正期には高尾楓蔭は大阪朝日新聞記者になっているから、あるいは事件後の沖野岩三郎との直接の接触もあったのかも知れない。

沖野が『宿命』に高尾のお伽芝居上演中止事件をなぜ盛り込んだのか、もう一つ注目すべきは、大逆事件の進行と同時期にそれが行われていたことである。そのため高尾楓蔭は身の危険を感じて、大阪に戻ると当時の大阪府警察部長池上四郎を訪ねて、三重県津市の顛末を説明している（高尾亮雄、一九二九、三六―三七頁）。これは故なことではなく、京都日出新聞主筆の大道雷淵も、お伽芝居やお伽倶楽部を応援していた人だが、大逆事件で検事の取り調べを受けているのだ（堀田穰、二〇〇三）。その辺のことを沖野岩三郎が知っていたか、いなかったかはわからないが、早くに社会主義から袂を分かった高尾のお伽芝居について、家庭劇の活動までを注視していたようで、自由を求めるものとして、相当好意的な目で見ていたのではなかったろうか。もとより、大逆事件はフレームアップであり、昭和の社会主義者のような党派性などは沖野岩三郎にも、大石誠之助にもはじめからあるわけがないのであったが、それにしても紙一重の違いを痛感せざるを得なかったであろう。

ただ狭い知見の範囲だが、『宿命』の先行研究に高尾楓蔭の名を見つけることは出来なかったので、ここに



写真 4 大石誠之助の墓 新宮市南谷墓地（撮影筆者）



写真 5 大逆事件犠牲者の顕彰碑 新宮市春日4-18（撮影筆者）

敢えて書き留めておこうと考えた。朝日新聞投稿原稿の『宿命』が今後発見され、刊行されることが望ましいが、事件から百年以上経った今、文学研究だけでなく、社会史研究の分野等、より多様な視点から現行の『宿命』が読まれることで、新たな事実が発見されて行くのではないだろうか。

引用参考文献

『伊勢新聞』一九〇八年十月三日

稲垣直樹「ユゴーと日本」『日本における翻訳文学（研究篇）』（図説翻訳文学総合辞典第五卷）二〇〇九、大空社・ナグ出版センター

版センター

岡崎一「和歌山市時代の沖野岩三郎（一）八」一九八四年一月～九月『白金通信』

小川武敏「沖野岩三郎論―大逆事件と宿命感を中心として―」一九七二、『文学』第四〇巻第三号

沖野岩三郎『宿命』改訂版、一九二六、福永書店

沖野岩三郎「大逆事件の思い出」一九五五初出『文藝日本』、『牛王』第八号、二〇一一

川戸道昭・榊原貴教『図録日本の翻訳文学・図説日本翻訳文学史』（図説翻訳文学総合辞典第一巻）二〇〇九、大空社・ナグ出版センター

ダ出版センター

『熊野新報』一九〇八年十月十二日

佐藤実枝「ユゴー」（ロマン派の指導者）『日本大百科全書』一九九四、小学館

高尾亮雄「お伽芝居『うかれ胡弓』の脚本を記録しておくに就て」一九二九初出『子供の世紀』一～五月号、堀田穰編

『大阪お伽芝居事始め―「うかれ胡弓」回想と台本―』一九九一

武内善信「高尾楓蔭小論―初期社会主義とお伽芝居―」一九九六『ヒストリア』第一五〇号

塚本章子「明子と寛、大逆事件の深き傷跡―〈新資料〉沖野岩三郎宛、明子紀州旅行の礼状―」二〇〇七『日本近代文学』第七七号

学』第七七号

辻本雄一、熊野新聞社編『大逆事件と大石誠之助―熊野一〇〇年の目覚め―』二〇一一、現代書館

辻本雄一『「大逆事件」と熊野新宮の犠牲者たち』二〇一四、和歌山人権研究所

外山敏雄「札幌農学校草創期の人々：W. P. Brooks 及び荒川重秀」一九七四年『英学史研究』第七号

福森裕一「沖野岩三郎著『宿命』―「懸賞文芸募集」から新聞連載に至る経緯を中心として―」二〇〇九A『阪神近代文

学研究』第一〇号

福森裕一「沖野岩三郎『宿命』原稿における一考察」二〇〇九B『千里山文学論集』第八二号

福森裕一「沖野岩三郎の『宿命』における父子問題―利雄と須基子を中心に―」二〇一〇『千里山文学論集』第八四号

福森裕一「大正十五年改訂版『宿命』―大正八年刊初版本との比較において―」二〇一二『国文学』第九六号、関西大学

文学会

『文藝画報』一月号、一九二二年一月二十八日、文藝画報社

堀田穰「高尾亮雄の演劇活動―社会劇↓お伽芝居↓家庭劇―」二〇〇一『人間文化研究』第七号

堀田穰「雷淵大道和一、お伽運動への関わりと、その死」二〇〇三『人間文化研究』第一一号

堀田穰「高尾亮雄と女たち―菅野スガ・三芳万里子・古屋登世子―」二〇一二『人間文化研究』第二九号

